

親鸞における「個の尊厳と存在の平等」

—その成就の原理と事実—

谷 眞 理

はじめに

本誌第九十四号掲載拙稿「部落差別問題と真宗学」において、これまで「部落差別問題と真宗学」を課題とすることをとおして、「個の尊厳と存在の平等」について憶念していることを記した。差別・人権問題や非核・非戦の問題はもとより人間が人間であるための課題が「個の尊厳と存在の平等」というテーマに顕彰されるのではないかと考え、それを視点として真宗学を志してきた。本稿では、親鸞における「個の尊厳と存在の平等」、その成就の原理と事実について考察してみたい。

一 「個の尊厳と存在の平等」について

「個の尊厳と存在の平等」の意味、内容については、本誌第九十四号掲載の拙稿「部落差別問題と真宗学」に記した。『仏説無量寿経』の「吾当於世 為無上尊」(『真宗聖典』二頁)という経言の「無上尊」という仏語に導かれ、ま

た親鸞の「無碍光」「無碍」の領解に導かれて、「唯一無二の比べようのない、かけがえのないいのちをすべてのいのちと共に生かされて生きる一人の尊厳、その一人々々が異なる存在でありつつ、互いにその差異を認め合う平等性」を内容とする言葉として使用し、考察している。人間の性、年齢、出生、職業、地域、住民、言語、教育、宗教、思想、人種、民族等の差異は、「個の尊厳と存在の平等」なるものとして、本来は認め合うべきものである。その差異を認めないことから、迫害、虐待、侮蔑、蔑視、排除等が生じる。したがって、差別とは、人権侵害とは、「個の尊厳と存在の平等」を認め合わないで、「個の尊厳と存在の平等」を侵害することであると考ええる。共に生き合うということは、「個の尊厳と存在の平等」を認め合い、保持し合うことである。「個の尊厳と存在の平等」が成就するとき、人間が人間と成り、共に生き合うものと成る。

差別・人権問題、非核・非戦の問題、環境破壊やさまざまな現代社会の病理等は、「個の尊厳と存在の平等」の保持や喪失、障碍、侵害等にもつわる問題であると考ええる。したがって、「個の尊厳と存在の平等」は人間の社会を「見る」(見老病死 悟世非常 聖典三頁) 視点であり、人間の普遍的課題であると思う。『大経』の経言が「世の非常」ではなく、「世の非常」と説かれていることに注目したい。「無上尊」と成ることを妨げる「世の非常」が問題であり、釈尊はその「世の非常」を見て、求道に立ちあがった。

人間は他の「いのち」を摂取しなければ生きられない存在であると同時に、死という「いのち」の限界を持って生きる存在である。しかしながら、その悲しむべき痛むべき存在の事実を「見る」ことができないで、仏智をも疑い、人生を「空過」させる悲惨さを持つ存在でもある。そのような存在の人間が、政治的、経済的、社会的、文化的、科学的に、あらゆる自力のはからいを駆使したとして、「個の尊厳と存在の平等」は成るであろうか。成ると考えて、成るようにならうとして成らなかつた事実が、世界中に蔓延する差別問題、人権侵害、戦争、環境破壊等々ではないだろうか。「世の非常」を「見る」ということの重大さと同時に難しさを思い知らされる。

「個の尊厳と存在の平等」に関わるときに、我々が気づかないまま陥りやすいことがある。それは「強者の論理」であり、「健常者の論理」である。「個の尊厳と存在の平等」が普遍的課題と成るといふことは、「個の尊厳と存在の平等」を問いとして共有し合う関係性の中において願ひ求められて成るものである。しかし、「個の尊厳と存在の平等」が保たれるならば社会が安穩になるであろうと考えて、人々に「個の尊厳と存在の平等」を求めることを意図的に社会的に流布させようとする人、即ち社会的指導者？の立場に在る人が、その立場から社会の安穩を意図的に民衆に求めるとき、それは強者の立場からの発想、「健常者」の発想になりがちである。社会的に指導者たらんとする人が、立場の逆転を許さないような前提で民衆に求めるものならば、たとえそれが正義であるとされることであつたとしても、それは虚仮不実なものになつてしまふであろう。そして、いつしかそれは具現化することなく「スローガン化」してしまふであろう。それに類する過ちを我々は社会的営みの中で幾度も繰り返してきた。したがって、誰が、何を、どのように求めるのが常に問われるのであり、問うのでなければならぬ。

二 親鸞における「個の尊厳と存在の平等」

「個の尊厳と存在の平等」が時代社会を超えた人間の普遍的課題であり、その主体と目的が問われると考えるとき、重要なことは宗教のはたらきではないかと考える。まさしく宗教の「宗」が、「教」が、その「普遍性」や「転成性」が問われるであろうし、「個の尊厳と存在の平等」が成就する原理と事実が問われてくるであろう。

私は、浄土真宗は親鸞によつて群萌に開かれた「個の尊厳と存在の平等」を成就する宗教であると領受している。親鸞が生涯において持続した問いと求道は、「個の尊厳と存在の平等」の成就を願求して共に生き合うものと成るといふことであつたのではないかと愚考する。そのように考えるとき、そこに親鸞の生涯とその教えの現代的意味が自らの中に明らかになつてくる。

その親鸞における「個の尊厳と存在の平等」について、これまでの考察の過程をとおして基底とするようになった視座は、釈尊の「慙愧」の精神と親鸞の「無慚無愧」の精神である。

二つの白法あり、よく衆生を救く。一つには慙、二つには愧なり。「慙」は自ら罪を作らず、「愧」は他を教えて作さしめず。「慙」は内に自ら羞恥す、「愧」は発露して人に向かう。「慙」は人に羞ず、「愧」は天に羞ず。これを「慙愧」と名づく。「無慙愧」は名づけて「人」とせず、名づけて「畜生」とす。慙愧あるがゆえに、すなわちよく父母・師長を恭敬す。慙愧あるがゆえに、父母・兄弟・姉妹あることを説く。

〔教行信証〕「信卷」真宗聖典二五七頁

これは、親鸞が『教行信証』「信卷」に引用している『涅槃経』の一文である。「慙愧」無きものは「人」とせず、「慙愧あるがゆえに、すなわちよく父母・師長を恭敬す。慙愧あるがゆえに、父母・兄弟・姉妹あることを説く。」ということは、慙愧あるがゆえに家族をはじめ社会における人間関係は成り立つのであるとの教説である。この釈尊の教説から、「慙愧」あるがゆえに「個の尊厳と存在の平等」は成る、即ち「個の尊厳と存在の平等」は「慙愧」無きところには成り立たないのであるとの教説であると領受する。

その釈尊の教えの精神を大切にしたい親鸞が、『正像末和讃』に、
無慚無愧のこの身にて

まことのころはなけれども

弥陀の回向の御名なれば

功德は十方にみちたまう

蛇蝎奸詐のころにて

自力修善はかなうまじ

如来の回向をたのまでは

無慚無愧にてはてぞせん

〔正像末和讃〕 聖典五〇九頁

と悲歎述懐している。

釈尊の教えの精神を大切にされた親鸞が、なぜわが身を「無慚無愧の身」と悲歎述懐したのか。ここに親鸞の生涯の求道の精神と遇縁、遇法の内実を竊かに窺う。

『正像末和讃』は親鸞八十六歳のときに補訂されているが、いつ作られたものか定かではない。「無慚無愧」という悲歎述懐の自己表現に至ったのは晩年であると思うが、小論においては、親鸞の「無慚無愧の身」という内親は、親鸞が生涯持続した苦悩や問いと深い関わりがあるのではないかとこの観点から再考してみたい。

「無慚無愧のこの身にて まことのころはなけれども 弥陀の回向の御名なれば 功德は十方にみちたまう」ということ、「蛇蝎奸詐のころにて 自力修善はかなうまじ 如来の回向をたのまでは 無慚無愧にてはてぞせん」ということは、

一切の群生海、無始よりこのかた乃至今日今時に至るまで、穢悪汚染にして清浄の心なし。虚仮諂偽にして真実の心なし。

〔教行信証〕「信卷」 聖典三二五頁

煩悩具足の衆生は、もとより真実の心なし、清浄の心なし。濁悪邪見のゆえなり。

〔尊号真像銘文〕 聖典五二二頁

という凡夫の存在の事実と、「弥陀の回向の御名」のはたらきによって凡夫の無明の闇が破られるということが、不即不離の關係として領受されていることを顕していると解する。「無慚無愧」とは、慚愧心が無いのではなく、慚愧しているようでありながら慚愧が慚愧にならないわが身への慚愧、深い悲歎述懐なのではないか。これは本願の名号の回向あつての悲歎であり、「無慚無愧の身」に対しての「弥陀の回向の御名」であることを顕している。「無慚無

愧」という慙愧心は、自力のはからいによって生ずるものではなく、本願の名号の回向成就による「如来よりたまわりたる」心である。したがって、「無慚無愧の身」という慙愧は、「深く如来の矜哀を知りて、師教の恩厚を仰ぐ」〔教行信証〕後序 聖典四〇〇頁）ことと一つのものであろう。遇縁・遇法をとおしての悲歎述懐である。けっして晩年の唐突的な一過的な悲歎述懐ではない。「無慚無愧」と表現するに至った問題意識とその内容は、比叡山において求道をはじめから生涯持続し続けた苦悩の基底に流れるものであり、内観し続けた問いの基底を成すものではなかったろうか。「無慚無愧」と表現するに至る悲歎と同質の苦悩と求道心があつたがゆえに、

雑行を棄てて本願に帰す

〔教行信証〕後序 聖典三九九頁）

という親鸞の回心に成つたと考える。親鸞は、諸行の中から取捨選択して自己満足できる行や願を選び取つたのではない。それまでの行を雑行として棄てたのである。なぜ雑行として棄てたのか。

比叡山において修学、修行しているとき、比叡山はもとより平安京の都全体は殺生禁断思想、触穢思想が渦巻き、世の中全体が「個の尊厳と存在の平等」の成就の願いからは遠くかけ離れてしまっている状況にあつたと考察している。その現実に対して、仏教の僧である親鸞は、どのように真向かい、どのように慙愧の念を抱いているのか、という自らを問い糾す自らの問いに苛まれる身でもあつたのではないだろうか。即ち自らが生きている世の現実と乖離しながら断惑証理の行に専念せざるを得ぬ身、慙愧が慙愧にならないわが身、その如何ともしがたい生きざまが、わが身自身を深く問うてくる身となつていたのではないかと想像する。断惑証理の行を修しているわが身は、如何にも真実を求め、真実を問うているかのようにであるが、断惑証理の行は一切衆生を仏と成す真実の行たるのか、と実は真実から問われている身であるのだという覚醒もたらず苦悶、それが親鸞の比叡山における苦悩ではなかつたか。釈尊の教えを学んでいながらも、慙愧すべきことを慙愧しえない身、そういうわが身を羞恥する心が無いのであれば、比叡山を降りることはなかつたのではないか。また、釈尊の教えに挫折したり、教えを捨てたのであれば、比叡山を降

りた親鸞がなぜ六角堂に参籠するのであるうか。本願力回向のはたらきにより気づかせていただいた「無慚無愧の身」という慚愧の自己表現に至らぬうちにも内在しつづけた同質の苦惱。その苦惱と求道があつてこそその法然との出遇い、選択本願の念仏との出遇いであり、「雑行を棄てて本願に帰す」回心ではなかつただろうか。

「雑行を棄てて本願に帰す」と表白した親鸞は、その生涯において、「無慚無愧の身」の自覚を共にし、共に生き合う人々との連帯を「われら」という言葉で顕している。

十方衆生というのは、十方のよろずの衆生なり。すなわちわれらなり。

〔尊号真像銘文〕 聖典五二二頁

と。「十方衆生」とは本願の対告衆である。われらは本願の対告衆であると明言している。けつして、我一人のみ、一人ぼっちの孤立した存在ではない。また、

凡夫は、すなわち、われらなり。

〔一念多念文意〕 聖典五四四頁

凡夫というのは、無明煩惱われらがみにみちみちて、欲もおおく、いかり、はらだち、そねみ、ねたむころをおおく、ひまなくして臨終の一念にいたるまでとどまらず、きえず、たえずと、水火二河のたとえにあらわれたり。

かかるあさましきわれら、(略)

(同 聖典五四五頁)

というように、「煩惱具足の凡夫」のわれらと顕している。そして、「流転輪廻のわれら」、「ひさしくしづめるわれら」、「煩惱成就のわれら」、「五濁悪世のわれら」(以上『高僧和讃』)と表現しているが、『歎異抄』に、

しかるに仏かねてしらしめして、煩惱具足の凡夫とおおせられたることなれば、他力の悲願は、かくのごときわれらがためなりけりとしられて、いよいよたのもしくおほゆるなり。

〔歎異抄〕 九 聖典六二九頁

と記されているように、「煩惱具足の凡夫」のわれらは「他力の悲願」の正機であると領受したことが明らかである。さらに『唯信鈔文意』に、

ようよう、さまざまの、大小聖人、善悪凡夫の、みずからがみをよしとおもうころをすて、みをたのまず、あ

しきころをかえりみず、ひとすじに、具縛の凡愚、屠沽の下類、無碍光仏の不可思議の本願、廣大智慧の名号を信樂すれば、煩惱を具足しながら、無上大涅槃にいたるなり。具縛は、よろずの煩惱にしばらくたれたるわれらなり。煩は、みをわずらわす。悩は、ころをなやますという。屠は、よろずのいたるものを、ころし、ほふるものなり。これは、りようしというものなり。沽は、よろずのものを、うりかうものなり。これは、あき人なり。これらを下類というなり。(中略)。りようし・あき人、さまざまのものは、みな、いし・かわら・つぶてのごとくなるわれらなり。

〔唯信鈔文意〕 聖典五五二頁

と記し、『歎異抄』に、

うみかわに、あみをひき、つりをして、世をわたるものも、野やまに、ししをかり、とりをとりて、いのちをつぐともがらも、あきないをもし、田畠をつくりてすぐるひと、ただおなじことなり。

〔歎異抄〕 一三 聖典六三四頁

と伝えられていることから、親鸞は「下類」に、また「いし・かわら・つぶてのごとき」存在に、そして「群萌」に自己を見て、「われら」と名告っている。殺生禁断思想、触穢思想が蔓延する時代社会において「下類」とされる存在、石・瓦・礫のごとき存在は、存在そのものが無視され、仏教に縁無きものとされ、当時の「聖道の諸教」の救いの対象とはされていない。一切衆生の救いという仏教の精神に違背し、「下類」や「群萌」を排除した特定の人間のための宗教である「聖道の諸教」は、宗教的生命である「個の尊厳と存在の平等」を喪失し、むしろ「個の尊厳と存在の平等」を侵害している。それに対して「非僧非俗」と名告り、「愚禿」と名告った親鸞は、

すべて、よきひと、あしきひと、とうときひと、いやしきひとを、無碍光仏の御ちかいは、さらわず、えらばれず、これをみちびきたまうをさきとし、むねとするなり。眞実信心をうれば実報土にうまるとおしえたまえるを、浄土眞宗の正意とすとしるべしとなり。

〔唯信鈔文意〕 聖典五五二頁

と確信し、

ようよう、さまさまの、大小聖人、善悪凡夫の、みずからがみをよしとおもうところをすて、みをたのまず、あしきところをかえりみず、ひとすじに、具縛の凡愚、屠沽の下類、無碍光仏の不可思議の本願、廣大智慧の名号を信樂すれば、煩惱を具足しながら、無上大涅槃にいたるなり。(同)

と明言した。『歎異抄』には、

弥陀の誓願不思議にたすけられまいらせて、往生をばとぐるなりと信じて念仏もうさんとおもいたつころのおこるとき、すなわち撰取不捨の利益にあずけしめたまうなり。弥陀の本願には老少善悪のひとをえられず。ただ信心を要とすとしるべし。そのゆえは、罪悪深重煩惱熾盛の衆生をたすけんがための願にてまします。

〔歎異抄〕 一 聖典六二六頁

いずれの行にても、生死をはなることあるべからざるをあわれみたまいて、願をおこしたまう本意、悪人成仏のためなれば、他力をたのみたてまつる悪人、もつとも往生の正因なり。

〔歎異抄〕 三 聖典六二七頁

しかるに仏かねてしろしめして、煩惱具足の凡夫とおおせられたることなれば、他力の悲願は、かくのごときわれらがためなりけりとしられて、いよいよたのもしくおほゆるなり。

〔歎異抄〕 九 聖典六二九頁

と、師訓が遺されている。「撰取不捨の利益にあずけしめたまう」とは、即ち見捨てられることはないということである。老少善悪の人を選ばない。いずれの行にても、生死を離ることあるべからざる人を哀れみたもう。そのような「罪悪深重煩惱熾盛の衆生をたすけんがための願にてまします」ゆえに、「他力の悲願は、かくのごときのわれらがためなりけりとしられて、いよいよたのもしくおほゆるなり」と師親鸞の遺教を伝えている。

親鸞は、「すべて、よきひと、あしきひと、とうときひと、いやしきひとを、無碍光仏の御ちかいは、きらわず、えらばれず、これをみちびきたまうをさきとし、むねとするなり。眞実信心をうれば実報土にうまるとおしえたまえ

るを、浄土真宗の正意とすとしるべしとなり。」(『唯信鈔文意』)と言ひ、下類、石・瓦・礫のごとくなるわれらが「無碍光仏の不可思議の本願、廣大智慧の名号を信樂すれば、煩惱を具足しながら、無上大涅槃にいたるなり。」(同)と言いきつてゐる。「無碍光仏」の誓願不思議にたすけられまいらせて、「無上大涅槃」に至る、これが「浄土真宗の正意」であると。「すべて、よきひと、あしきひと、とうときひと、いやしきひと」を「きらわず」、「えらばず」、「みすてず」、「これをみちびきたまうをさきとし、むねとする」無碍光仏の誓願、この無碍光仏の誓願こそ「個の尊嚴と存在の平等」を成就する誓願である。

三 その成就の原理と事実

親鸞は、「無慚無愧のこの身にて まことのころはなけれども 弥陀の回向の御名なれば 功德は十方にみちたまう」、「蛇蝎奸詐のころろにて 自力修善はかなうまじ 如来の回向をたのまでは 無慚無愧にてはてぞせん」と悲歎述べた。ここには、「無慚無愧の身」の「われら」の救ひの原理は、「弥陀の回向の御名」であること、そしてその功德が「われら」十方衆生に満ちわたるといふ転成の事実が顕されてゐると解する。その原理と事実を顕彰し、公開することが、親鸞が荷負した使命ではなかつたか。

親鸞は、『教行信証』の冒頭に、

謹んで浄土真宗を案ずるに、二種の回向あり。一つには往相、二つには還相なり。往相の回向について、真実の教行信証あり。

それ、真実の教を顕さば、すなわち『大無量寿経』これなり。

この経の大意は、弥陀、誓いを超発して、広く法蔵を開きて、凡小を哀れみて、選びて功德の宝を施すること
をいたす。釈迦、世に興して、道教を光闡して、群萌を拯い、恵むに真実の利をもつてせんと欲してなり。こ

こをもって、如来の本願を説きて、經の宗教とす。すなわち、仏の名号をもって、經の体とするなり。

〔教卷〕 聖典一五二頁

と顯している。浄土の真実の教行信証の原理は「回向」であること、そして真実の教は如来の本願を宗、即ち要とし、仏の名号を体とすることを明言している。真実の宗教は、如来の本願力の回向を原理とするものであることを顯し、その体は南無阿弥陀仏の名号であることを表白し、その如来の本願と仏の名号の關係を『教行信証』六卷にわたって明証していると解する。凡小を哀れみて、選びて功德の宝、即ち名号を施与する弥陀、真実の利、即ち如来の本願をもって群萌を救わんとする釈迦、その弥陀・釈迦二尊の招喚と發遣が本願の名号として回向成就することを顯し、本願力回向成就の故に如来の名号を聞信する一念即時に正定聚不退の位に住し、煩惱具足の凡夫が煩惱具足の凡夫のままに願生浄土の道を生きる者と成ることを親鸞は『教行信証』に顯したのであると解する。特に「信卷」においては、本願成就文の領解をとおして本願力回向の原理を明証した。

諸有衆生 聞其名号 信心歡喜 乃至一念 至心回向 願生彼国 即得往生 住不退転 唯除五逆 誹謗正法
と云第十八願成就文を、
〔大經〕 下卷 聖典四四頁

諸有衆生、その名号を聞きて、信心歡喜せんこと、乃至一念せん。至心に回向せしめたまえり。かの国に生まれんと願すれば、すなわち往生を得、不退転に住せん。ただ五逆と誹謗正法とをば除く、と。

〔信卷〕 聖典二二二頁

と訓じ、『教行信証』「信卷」においては「乃至一念」で切って、信樂釈では「本願信心の願成就の文」として、

諸有の衆生、その名号を聞きて信心歡喜せんこと、乃至一念せん。
〔信卷〕 聖典二三八頁

と読み、欲生釈には「本願の欲生心成就の文」として、

至心回向したまえり。かの国に生まれんと願ずれば、すなわち往生を得、不退転に住せんと。唯五逆と誹謗正法を除く。
(同 聖典二三三頁)

と読んで、この願成就文の一念を信の一念と解した。これを「乃至一念」で切るのではなく、下の「至心回向」に連続するものとするならば、「その名号を聞いて、信心歡喜して乃至一念までも至心に回向して、彼の国に生まれんと願ひ、即ち往生することを得て不退転に住せん」となって、「乃至一念」が「至心回向願生彼国」に通じ、行の一念ということになり、至心回向も自力の回向と領解されねばならなくなってくる。しかし、親鸞は「至心回向」を「至心に回向せしめたまえり」「至心に回向したまえり」と訓じ、回向の主体は如来にあること、本願の成就は本願の回向成就によつて真の本願成就の意義があきらかになることを証したのである。本願成就文を詳細に解釈している『一念多念文意』においては、

「至心回向」というのは、「至心」は、真実ということばなり。真実は阿弥陀如来の御ころなり。「回向」は、本願の名号をもつて十方の衆生にあたえたまう御のりなり。
(『一念多念文意』 聖典五三五頁)

と解釈している。「回向は、本願の名号をもつて十方の衆生にあたえたまう御のりなり。」とあるが、この本願の名号の回向は、煩惱具足の凡夫の上にとどのように顕彰されるのであろうか。

「信卷」(末)の願成就文の領解には、
聞と言うは、衆生、仏願の生起・本末を聞きて疑心あることなし。これを聞と日うなり。

(「信卷」 聖典二四〇頁)

と説き、さらには『一念多念文意』には、

「聞其名号」というのは、本願の名号をきくとしたまえるなり。きくというは、本願をききてうたがうころなきを「聞」というなり。また、きくというは信心をあらわす御のりなり。
(『一念多念文意』 聖典五三四頁)

と説いている。本願の名号の回向は、凡夫においては本願の名号を「聞く」ということが第一義である。ただし、本願の名号を聞く、仏願の生起本末を聞くということは、「聞く」といっても、凡夫の自力作善ではない。聞くとは、聞即信、聞くというところに願心の徹底があると明かしている。それでは、本願の名号を聞くとは如何なることか。

親鸞は、『教行信証』「行巻」に、

謹んで往相の回向を案ずるに、大行あり、大信あり。大行とは、すなわち無碍光如来の名を称するなり。この行は、すなわちこれもろの善法を摂し、もろもろの徳本を具せり。極速円満す、真如一実の功德宝海なり。かるがゆえに大行と名づく。しかるにこの行は、大悲の願より出でたり。

（「行巻」 聖典一五七頁）

と顕している。「行巻」の標拳に「諸仏称名の願 浄土真実の行 選択本願の行」と顕しているように、「諸仏称名の願」は、「浄土真実の行」である。大行は、浄土の行、仏の行であつて、凡夫が自らの成仏のために行ずる行ではない。仏が凡夫のために凡夫に回向する「選択本願の行」である。凡夫が自らの行として無碍光如来の名を称するのではない。諸仏が無碍光如来の名を称するのである。

第十八願成就文の「聞其名号」の「その名号」とは、第十七願成就文

十方恒沙の諸仏如来、みな共に無量寿仏の威神功德不可思議なるを讃嘆したまう。

（「行巻」 聖典一五八頁）

の名号である。

名号即ち「南無阿弥陀仏」は、摂取不捨の大慈悲心の無量光（智慧）・無量寿（慈悲）のはたらきを具足した仏名「南無阿弥陀仏」である。南無阿弥陀仏は阿弥陀仏の南無せよとの呼びかけ、如来招喚の勅命である。その本願の名号・南無阿弥陀仏の名を、釈迦・諸仏が凡夫に対して阿弥陀仏に南無したてまつれとすすめる。如来招喚の勅命と釈迦遺の教命によつて、本願の名号が凡夫に回向されて「聞其名号」即ち聞名として成就し、阿弥陀仏に南無したてまつるといふ凡夫の表白となる。私は阿弥陀仏に南無したてまつるものです、といふ名告りと成る。阿弥陀如来の仏

願と釈迦・諸仏の称名のはたらきによつて聞名する時、本願力回向の信心をたまわり、その眞実信心の利益として現生正定聚に住する身と成つた凡夫は、報恩感謝の念仏を称える。それが凡夫における念仏、報恩感謝の称名念仏である。凡夫は南無阿弥陀仏という仏名を称える前に、南無阿弥陀仏から呼びかけられ、釈迦・諸仏が南無阿弥陀仏と称えている名を聞かせていただいているのである。けつして、無数の神仏の中から凡夫が自我關心を満たす神仏の名を選び取つた結果として、南無阿弥陀仏と称えるのではない。南無阿弥陀仏の名を称するとは、南無阿弥陀仏の名を聞くものが、南無阿弥陀仏の名に込められている本願、招喚の勅命を聞いて、「煩惱具足の凡夫」「無慚無愧」のわが身のことを常に念じたもう仏の名を南無阿弥陀仏と称え、「無量寿如来に帰命し、不可思議光に南無したてまつる」念仏者として願生浄土の志願を歩むのである。親鸞は、その「南無阿弥陀仏」の名号の意味と願いを具足し、「十方世界をつくして」「衆生の煩惱悪業にさええられざる」(『尊号眞像銘文』 聖典五一八頁) 尽十方無碍の「光如来」、即ち十字名号「帰命尽十方無碍光如来」を眞仏、本尊とした(『教行信証』「眞仏土卷」、『尊号眞像銘文』 本、「一念多念文意」、『唯信鈔文意』、『御消息集』、『改邪鈔』)。

本願の名号の回向、その回向によりたまわりたる信心を親鸞は「眞実信心」と言う。信は「大信」すなわち如来回向の信である。

一般的に宗教において眼目とされるのは信心であろう。信心の発起、信心の獲得、信心の深まりを求めることが信心的な真面目さとされる。しかし、その信の眞実性、清浄性は信自体が証できるものではない。どれほどその信の眞実性、清浄性を主張していても、「やるべき業縁のもよおせば」、邪信、疑信に変わるのが、われらが信である。親鸞は、

もしは行・もしは信、一事として阿弥陀如来の清浄願心の回向成就したまうところにあらざるることあることなし。

と言ひ、「信は願より生ず」(「高僧和讃」 聖典四九六頁)と領受している。すなわち信の真实性、清浄性は願にある。願が真実、清浄であれば、その願より生じた信は真実、清浄である。願が不実、不浄であれば、信は不実、不浄である。信心は自力無効であることを、信心は如来の本願力回向によりたまわるものであることを親鸞は明かした。

おおよそ大信海を案ずれば、貴賤・縑素を簡はず、男女・老少を誦わず、造罪の多少を問わず、修行の久近を論ぜず、(略) (「信巻」 聖典三三六頁)

その信心は「如来よりたまわりたる信心」、「清浄願心の回向成就したまう」本願力回向の信心である。凡夫の行信は凡夫の教・信・行・証ではなく、選択本願の行信、本願力回向の教・行・信・証であることを明証した、それが日本の宗教界における親鸞の無上なる、希有なる存在の意味であると思う。

本願の名号の回向による信心において、煩惱具足の凡夫は「かの国に生まれんと願すれば、すなわち往生を得、不退転に住せん。」と本願成就文には説く。

本願の名号の回向、そこにたまわる信心、それが「個の尊厳と存在の平等」成就の原理であり、その原理によって「かの国に生まれんと願すれば、すなわち往生を得、不退転に住せん」という事実が顕されると解する。

『一念多念文意』においては、「至心回向」の解釈のあとに、

「願生彼国」というは、「願生」は、よろずの衆生、本願の報土へうまれんとねがえとなり。「彼国」は、かのくにという。安楽国をおしえたまえるなり。「即得往生」というは、「即」は、すなわちという、ときをへず、日をもへだてぬなり。また即は、つくという。そのくらいにさだまりつくということばなり。「得」は、うべきことをえたりという。眞実信心をうれば、すなわち、無碍光仏の御ころのうちに撰取して、すてたまわざるなり。

「撰」は、おさめたまう、「取」は、むかえとると、もうすなり。おさめとりたまうとき、すなわち、とき・日をもへだてず、正定聚のくらいにつきさだまるを、往生をうとはのたまえるなり。

すなわち往生すとのたまえるは、正定聚のくらいにさだまるを、不退転に住すとはのたまえるなり。このくらいにさだまりぬれば、かならず無上大涅槃にいたるべき身となる（略）

（同 聖典五三六頁）

と説く。真実信心の利益として、現生に「正定聚のくらいに住す」、「かならず無上大涅槃にいたるべき身となる」、そして「煩惱を具足しながら無上大涅槃にいたる」道に立つて生きる者と成る、これが「個の尊厳と存在の平等」の成就の事実であると領受する。

四 その証道

「個の尊厳と存在の平等」を成り立たせる原理によって、「現生正定聚」、「現生不退」、「無上大涅槃道」という成就の事実が顕現する。このことと、『仏説無量寿経』の「吾当於世 為無上尊」（聖典二頁）という経言、さらに「見老病死 悟世非常」（聖典三頁）という経言の「無上尊」「世の非常」とが深く関わりと愚考する。共に「無上尊」と成らんという願いを障碍する「世の非常」に取り巻かれて生きている「われら」に、「個の尊厳と存在の平等」を成り立たせる原理によって、「現生正定聚」、「現生不退」、「無上大涅槃道」という成就の事実が顕現するとは、どのような事象として確かめられるのか。小論の冒頭に「個の尊厳と存在の平等が成ると考えて、成るようにしよう」として成らなかつた事実が、世界中に蔓延する差別問題、人権侵害、戦争、環境破壊等々ではないだろうか、「（個の尊厳と存在の平等）それは強者の立場からの発想、健常者の発想で、立場の逆転を許さないような前提で民衆に求めるものならば、たとえそれが正義であるとされることであつたとしても、それは虚仮不実なものになつてしまふであろうし、いつしか具現化することなくスローガン化してしまふであろう」と述べた。この問いを、自らが常に問われている問いとして持続しなければならぬ。「個の尊厳と存在の平等」成就の事実の内容としての「現生正定聚」、「現生

不退」、「無上大涅槃道」の教義理解ではなく、「個の尊厳と存在の平等」成就の事実として「現生正定聚」、「現生不退」、「無上大涅槃道」が顕現するとは、どのような事象なのかが多様な「世の非常」から問われてくる。「われら」が明らかにすべきは、「思想」のみではなく、「浄土の真宗は証道いま盛なり」（『教行信証』後序 聖典三九八頁）という仰せへの慙愧であり、総括であり、展望であろう。かつて出遇ったご門徒の「親鸞の教えのように生きている証を何か一つでもいいから身をもって示して欲しい」という声が、常なる今現在説法として、まさに「無慚無愧のこの身」に響いてくる。

第十八願文、そして願成就文に「ただ五逆と誹謗正法とをば除く」と説かれている。

唯除というは、ただのぞくということばなり。五逆のつみびとをきらい、誹謗のおもきとがをしらせんとなり。このふたつのつみのおもきことをしめして、十方一切の衆生みなもれず往生すべし、としらせんとなり。

（『尊号真像銘文』本 聖典五一三頁）

この唯除の文の願い、また『浄土論』の「普共諸衆生 往生安楽国」（聖典一三八頁）、「普くもろもろの衆生と共に」という願いを「個の尊厳と存在の平等」の成就を願う者は見失ってはならない。願いと乖離してはならない。

「すべて、よきひと、あしきひと、とうときひと、いやしきひと」を「きらわず」、「えらばず」、「みすてず」、「これをみちびきたまうをさきとし、むねとする」無碍光仏の誓願、その無碍光仏の誓願不思議にたすけられまいらせて、煩惱具足の凡夫のままに「广大智慧の名号」の回向による信心によって「必ず無上大涅槃に至る」道を共に生き合う身と成る、それは「無慚無愧のこの身」にたまわる無上の喜びである。